小栗外傳

七

へ13
3919
6

門へ13
號3919
巻 六

寒燈夜話 小栗外傳 巻之六

東都 絳山獸醜陳人戲編

第十編

舞妓寿を唄ふを密計の論を
老僧因の説く未前を示す

小栗判官代助重を馬を乗おさめく。静ふ横山ハ對ひ礼を做せど。横山ハ頼きゝふ法鬼駢の容易系あゞめふれ豫ての謀相違ー。仙中易ふゞといくども。まゝ謀ゞきことゝもあゝめと心あゝめふねど喜びの色を発ー。某ゞ日頃の望足せるとの喜ゞーと小栗ゞ馬術を賞美し酒肴をゆうけて食意ね。さて豫ての約速なれば絳ゝ照天姫と婚姻を整ー。此日よりして助重を照天ゞりとに止め。他事なくゝゆふ待遇ゝて。されども横山ゞ仙中ゆゝ。奈何ーて助重を失ふんと蜜ゝ甚子仕ホと謀り

々ぞう太郎次郎の兄弟ハ悪逆暴くるを照天姫を小栗ゐ奪られ主命毋るうこと
なく討果さんとおりゐ西るが二人をみ出ていくりろゐ小栗ゐて鬼神
あもはふび彼足と迂遠な謀を用ひまこと鬼騎ごとたことあくぶ塗ゐ
塗を附るがごとくるゝん不如速ゐ人数をりて討ゐんと知めたるを
三郎安武これを制し小栗主従の武勇慢ゞ力をりて討ゐんとせば
味方のりのをゝ多く扶ゞ且ゝ討漏さんとゝうりがゝ幸明日ゝ父の生
誕日なれば甚壽をるとと披露し小栗をまゐき酒を強乱酔の射を
そうて毒酒を呑ちめんゐいゐ猛き助重ゐもせよゐを下さゞしく
失ハて案の狸ゐり人くいうに老ひゐふと述られば父の安秀をこゞえ
兄ゐも限り好く喜びこれ千金の計策ゐりいざならば甚准備をゝと
俄ゐ酒肴をゝ〻の〻小栗ゞりとゐ云ゐりゐゐ明日ハ我生誕日なれば

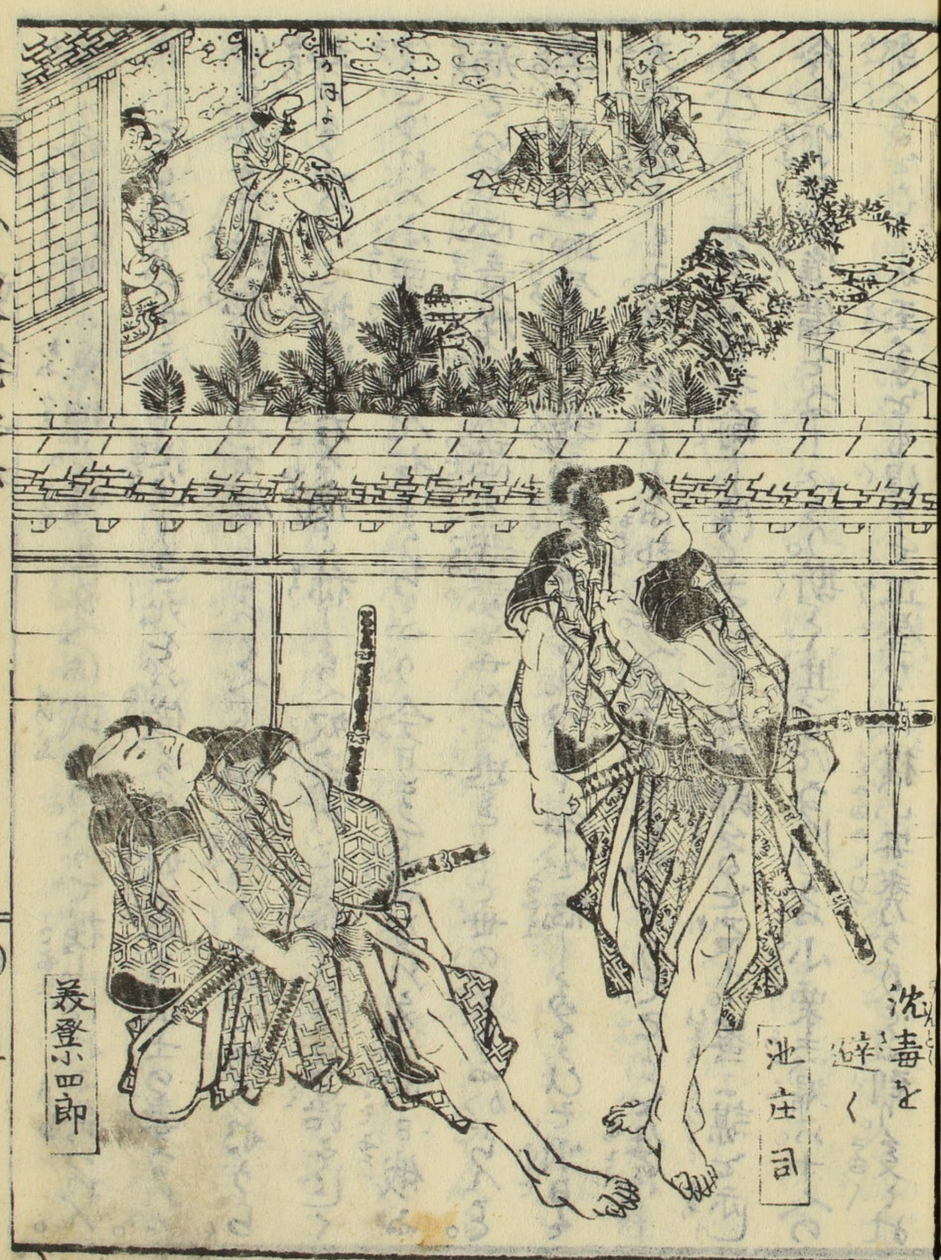
壽筵を催さんとゝと夫婦ゐ甚席ゐ連りて我壽を賀ゐくと有ゐゐ
小栗ゐ返辞べなゐゐ命畏りゐ明日の壽宴ゐゝとりまゐゐと
りゐゐと回意して使を選ゝび助重照天姫ゐ對ひ明日のてゝ汚名をいゐゐ
あゞとゞと同ゝび照天眉をゐゐ安秀ゞ近日の先景ゐを沒ゞ法ゐ
のみ多ゝ殿ゝゐつゝゝせゐりれ響ゐ恐ゐゐのゝ云罵ゐゐにて
より慇懃ゐ待遇まゐゐとゝ不審さゐゐゞりゝ足と彼ゝを想
あゐとれば明日のゐいと記掛し爾ゐ辞まゞ怪しゐられんこいゐふ
ゝて宜からんとうち案じゝりゝ俄然として膝を拍て云つりけゐゝ
ゝゐゐきゐうの事のゐ故武蔵國六浦の産ゐ娥とゐを女子ゐり
今ハ横山の侍女となりていゞゐ横山ゞ為ゐ匂引さん既ゐ娼女ゐ
考るゞゝしを奴家便るれゝゐゐ強ゐゐて我侍女とせり。その

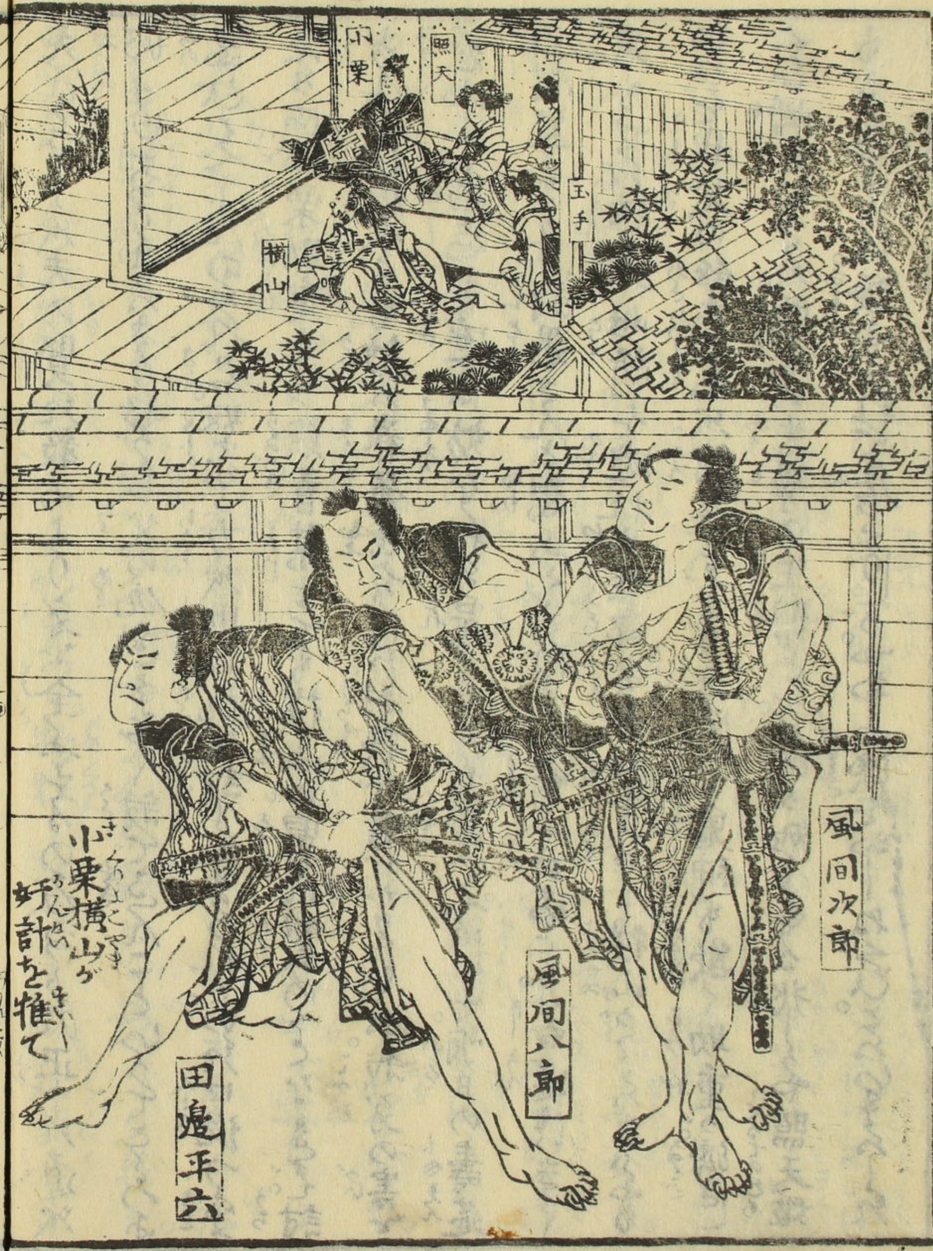
志津忠安ゆ出して且奇弄の伎ゆたけてゆを漢山潮くぶくんゆぶさじめ
ゆ似ぎこれを受し終ふ我物と酒宴ることゆ歌ゆとふ」弄謠
して平日ゆ側を去らしめど大事を議ゆ席ゆも立入らせり斯ぐり
漢山ゆ寵せらるゆまど甚公漢山を怨ゆこと甚ぐたぐ奴家ゆ娼婦ゆ
賣らしめざりし怨深く恩ゆ著。我身のことを誠ことゆれゆ忍ぐ告ぎ
そぐれが明日のことゆおそらく知りてゆらんぐ思ゆ密ゆ娥を招れゆぐ
と。ゆうて呼来して事のゆうをゆメけゆ。娥何ゆうゆ知りそぐらゆど。今日
漢山屋兄弟の人くと密に議ゆふことゆりて俄ゆ明日の事裏れ偽
ゆり。其ゆ猶不審とゆくどゆうゆる謀ぎつると知らば。明日ゆ身危ぎこと
めらゆ必告まゆゆらせんゆどゆ。涙くゆ悩ゆひとと思ゆふゆゆえて
去ゆり。小栗を娥ゆ抱語ゆうちゆメ居らりしゆ出往一跡ゆて照天姫ゆ

對し明日漢山ゆ壽宴ゆ必定我を謀なるべ。彼ゆ身ゆ陽恐ゆふ思ら
ざれと。名ゆ勇士と以くとゆ。運極ると知ゆ痴夫女子のゆゆ落命者。
和漢その例少らぐ。明日の命ゆとなく公遣まぎれど往ぐれゆ臆一
ら終ゆ似ぐり。弓矢とる身ゆ名とそ惜ゆれ。是彼のこと思ひ惟せど。
ゆん身と語らゆも今夜限りと成りやせん嗚呼定めるゆと世の中れ
ゆらゆし。今日まぐゆ云ゆて過しゆ今夜名殘となりゆせゆ怨こゆうん
ことの公憂ゆれゆメへまゆゆとし。ゆ身ゆ父ゆる光義ゆ樣死ゆ樣山
安秀の所為ゆり。そゆ這段くゆのことゆて知りゆと前日道助ゆ語
せくこゆ。おちゆく詳ゆゆメへ知らとゆ。照天姫ゆとれゆ身ゆうり。ゆう涙び
臥く嘆しゆ。ゆめゆて涙ゆちらゆし胸ゆうち薗切声ゆ震へ一云へり
ゆゆゆ知らゆねとらゆ云ゆゆら。天さゆ共ゆ世ゆ仇と一ッ家ゆ住居して。

朝夕敬ひかしづきしに想人ぐ会念腹さし今知るうらハ東間ゑ打捨
おくゐきことろと。小褄を高くゐ裏けく長押ゆかけ眉尖刀を小脇
ふかいとみいきまくく走り出んとする処を助重暫時と推止めとゆり
のふを道理あぐら我云處をよく分弟樽山幸都ぬれど丈夫ゆり。
猶ゐ五人の子どもをじめ猛悪漁ゑうは中人女子の唯一人義野達
ちて向ひあぐ石を抱ひて深淵ゑ望より。尚危ふ。返討ゆも成のらぐ。
いうで孝子といそるぐ死我世ゑ告ぎりしハ斯ゆるぐしとらくぐし。
さしたるき行状。人の誹謗をうけまふう篤光の女児助重ゑ妻なうふ
どや。父や夫の名を下ゑを本意とぐ思ひまふとこそぐろうなうと涙
ひまぐ照天姫ゆうぐ夫の涙を袖ゆ〜ふ公を静めとゑうりゆ〜ふ。
女心の一ぐもぐふ想ひ迫ゑくゐかゑゆく。物狂ゆ〜ふるまひ殆非命ゑ

死んとせ〜ゆ夫の賢死教ゆより。刃を全ふさるのみゆゑぐ正〜ゆ道ゆ
ゆるうりしゆり。さゑさり那ぐら父の仇をこそく討でるんことゆいそでゑうゑ
忍びそぐくんゆゆれ君。奴家ゑ力ゆ助け。仇を討てまゆれと。かゆ口説つゆ
えゆ涙小栗助重ゆち跪首某とても樽山ハ湯れ姫云のとなるぐ。討
ゑんとゆ想人ども。彼ハ春屋ゑ属ゑゆれぐ討換ゑゆぐなゆくゑゑ我刃の害を
惹出し。宿志を遂ゆ妨なれぐ。是ゆぐうちるゆぐりしゑ。明日の壽延
の附宜ゆより討果さんと想ゑんぐゆれども前ゑ云ゆとく。若運ゆきく
笑ゆ世ぐゆ刃此所を逃れ出我郎等と心を合〜樽山ゑ向ゑ
いゑぐと我父の姫ゑ一色ゆ討てとぐうり云さして鬼神も欺く助重ゑ涙さ
ゑむ姫ゆしさゑ明日の夫婦の生別ゆりのゑ知ゑゆる兆〜ゆ照天姫
もゑうとゆに涙ゑゆれて居ゑりしゑ。ゆゑら涙を拭〜ねぐひ。ゑいまゑ〜ゆ


うぢ子
義経小四郎
池庄司
沈毒を
逆く


小栗
照天
横山
玉子
風間次郎
風間八郎
田邊平六
小栗横山が
奸計を惟て

余が如き関八州に鬼神と呼ばれし武士の。いかで横山ばかりに失はれん。かりしことあらばかくと空しき死をば做すのみん。奴家も武士の妻なれば。いさぎよき討死せん身を厭ふにはあらねども。危ふき処と知りながら。赴むかんはいと拙し君は病と称して人奴家のこゝろへんと言語を近く聞こゆれば小栗殿を左右ならちこめり。今日まで恙なき身を明日俄に病とならば。畢竟横山が恐れ我妻を出して逃れしと世の人口にかからんを。生て世に恥辱あり我心既に決せり。いたく仏も悩ましまするひそ明日を夫婦諸ともに横山が許に赴かん。さて又くれぐれもあやまりてことを仕損じ給ひそとよく諭しける。さて十人の郎党を召し。密に謀を示し今世明日の準備をさせけり。斯て其日になりしかば小栗夫婦は十人の郎党をさしも玉手をも具して。正屋なる横山安秀が許に到り。さるぐれ

物なり。生誕日の壽をのぶるれば安秀喜びさるさまにて山海の珍味を整へ五人の子どもをして多くに饗應なり小栗をもてなし盃の献酬やまつらんと隈なく心ばかりはくまでさることありとも見えざれば。少しく心ゆり。酒酣なりしうち奥より出し照天姫は横山を父の仇とおもへど。仏理楽しまず。とりく小栗に目配せを助重も其心を知りけれども。横山を討べき隙もあらざれば。此所に長居せんは詮なしと思ひ酔たるていにてめてはしさでに其席をまかりなんとする時。横山安秀。小栗に對ひてやよ足下知らしめけるならん。我がよふ娥とや申す侍女のがうここ照天姫が侍女なり。手習なれど飛燕が業を粗知られば客人ある毎にか。あれに舞唄らして興を助けり。今日も彼に一曲を舞させそべらふこれを肴とし今一杯を傾けまへとすゝむるに助重辞せんゆうなくそれ与有

事ありてえびくんぞやとく舞さしまくと望こそる。安秀笑壺からく。
それくとありそれば。豫て公を沼こそうそん娥褒束あくくそめて水干ゐ
立烏帽子著。席の中央ゐ舞出こそう。助重これをえそるゐ。平日ゆこそ
ことかそう。鄙ゐ又訓ね姿そこのそ。そゐ正よ初花の縫んとそ彩ぐ
ぬく。谷の戸あけて賞るの初音に拍ーき声こそうあげ。

忘れても汲や志ほらん旅人の高丗の奥ゐ玉川の水

と云古歌をおーかくしく三度まで唄ひそゐーこそう。見関の人くこそ舞ゐ
のこ心奪ま。唱哥のことびくく事ゐく。たぐ登どよめたて奥ーこそう。小栗
夫婦ことの哥をゆ。彩ゐ事の蓮ゐーて。此哥を唄ふべきふゐくゐを推ゆて
三回ようで唄ひけること正ーく昨夜殆ーけるこのあれば模山が巧のゐど彩
明白ゐ云がくく哥ゐて知ひこそれなるべ。この舞ゐ高丗山の玉川こそ毒水

なれが人をして飲志ゐーじと。大師の渡ゐくるこそりてそれをうて是と想くを。
此後歩こと酒ゐゆ。ゐど毒ありそんと悟りそれば。ま帰目と目況え合ーこそゐ
ゐ事を彩ひ。これより後ハ幾回も盃こそ取こそ。飲てゆこそりてを。
一滴もくくゐ入ま。ど居こそうこそう。模山親子ゐ城が流ー唱歌こそも乙なこと。
まこと小栗が酒を呑ぎるをも志くふ。今こそそや想こそまこに流行こそうと密
ゐ森びこそう。小栗ゐ郎名の此酒を呑や志ほこそと。密ーゆこそうくゐおのづこそ
愁ひの色面ゐ彩ま。安秀心ゆく。小栗が彩をうちえこそゐ。常こそ怒し
光景こそのれば。こゐ正ーく毒酒の験彩ま。ーゆこそと心嬉ーく助重ゐ。
又ゆ。こそふ。ゐ彩ぐ世の常ゐこそゐゐ何こそ想ひこそふ今日こ
某が寿延こそう。添く物ゐおりひこそひそとおりそれば。助重怒こそ
ゐて奥ゐる寿延ゐて。いこぐ物をが想ひこぐらんいこそほこそゐ俄

幽地頃の去うなり。此の席を堪べうかく。さく退んと存じ奥どの夫人の
おやしうつほども畏こけまじ。かゝ仕りたる。今ゆるやに免式蒙ふ
ぞやと云ふ。樸山心理あゝ我誘ふわりと密ふ喜ぶとゝ人どもこぞ
ゝはおのゝちしそゝ知ふねことゝて引とゞめまゝゝ上はるこのこゝ色。
ゆゝ苦しからん。さく退り給ひて。ほいそゝりあれ上。女婿乃
心ち例ふ。ぞと宜ふ。誘ふ照天よ。
いひ罵り。慶様まで助け送りて別まけて。此時江岡加太郎同加茂前
の兄弟待うけて助重を助け供ん。小栗が腹の郎等居ゝざるを
こゝて。少程ゝ怪しみ其行悲を問へば。江岡兄弟畏ゝて申う。我く
手でも樸山殿の仇食奪ふあゞうう。誰ゝもいさく酒に酔ふに供仕る
ぞうも云へぞゝ孫が。殿ゝも安へあげ。これ前に退ゝん我く兄弟い。

知ゝ〜めとぞ〜く酒を呑ふれば酔どゝ。みそぐりのかゝと回意
ゝ者ぞ。小栗心驚る江且怒。彼們が酒を呑ふ酔て物の用ふたゞ
といふ。正〜く毒酒を呑ふるあてあゞ。なる云残ふもまゝ云念の
ゝなり。多くの郎等を害ぜられ。いかでおめく帰らるべき刀の後ん
限り。樸山一家のゝのいもを切殺〜。郎等の仇を報ゝんとさてそのの
色の面ふ殺且ゝれば。江岡兄弟これを猜。目ゝ〜く知〜し明筆等ゞ
酒ふ酔ふ常ふも知ゝ〜めしおゞら。今日酔ふ法をゞ怒りゝふ。
は仏を和ゝく思ゝ還りあれしと。助主ゞ手をとゝて。強ちふ引て還りゝれ
処ふ。風間兄弟兄弟豊小左衛門の三人出迎ゝ。小栗再びあゞ為き。
汝ふ酒を辞て物の用ふたゝ。ぞと。ぞ〜ふ。酔の醒ること不審
ゝれと。ぞ。江岡兄弟回意ゝ。不審ゝふ道理ゝ。昨夜君の

命を兼ねしが。今日横山のりとふ糸のごとくなる伏置やと家の隈〳〵。物の隙〳〵をはられどさる体もうく様ぶくハカ成りて敵〳〵がこゝろれば。毒害するごとくふやと。ひたくちりら。姫ぐ寄滝の声は笑こゆるふ耳をそばだてゝ。やがて高野ゞ師の玉川の寄うり。さてハ毒害のうること。姫の知りて知ぶしなるふとそ思ひ。人〳〵とよく滅り。酒を呑人を呑まをして呑ぶかくして毒を中ぶし侍よりてを〳〵。我〳〵より前〳〵選ぶし。君此地を落るわん准備をつぶし。我〳〵ぶ弟りとうを酒を嗜ざる成が人も知りてゆく。悪ふたさるふて跡を絶り。君はもん佐をぶはうまろれり。斯てる横山安秀。君をもゞの。我〳〵が家郎の光景をとゞけんと。自らまるゝ男児を来そろ。二ッの内を出べうふぶ君ハ風間兄弟の人〳〵成俱して落ぶ人。基兄弟ハ世不毋躙ふり。横山向ハ〳〵ふ。

君ハ人〳〵も毒ふあくり自害しまるくぶ。我〳〵ハ雲期の防矢射て其後自害をとゞ偽り。歩行ばうぶ横山をさく〳〵其後館ふ火をかけ。その移ふて乗ぶ。跡よりまりハ〳〵ふ助を甚深のことに称ふ賞し。疎ふまろし立退んとふおりぶ。仮方ふ落んと。躊躇をりうつ玉くまと姫喘息〳〵走まて立くりうれふ。君還〳〵せるふ。后。横山安秀。左郎次郎ふ下知。君の御光景を見届ぐべ。若い年ぐ死もやらぐもくぶ首討ちを上とて。部下の賊徒を催ふ。これ〳〵ふを見るふ心せうれ。辛ぐ忍びまわりハ。〳〵落ぶ人。さいハ姫ぐ故郷を六浦ふてこれよりハ行も近ぶ一ちぐ彼所人を退ぶ人〳〵とよく議論も角もはしる人奴家案内〳〵ふ。とゞとゞとふ。小栗主ハ婦今ハ究猿林を投ぶるの附なぶハ。いみで木と撃ぶふ。皇ハらん姫ぐ。〳〵ふ。小栗ハ鬼駒ふうち。照天の姫ぐ美畳

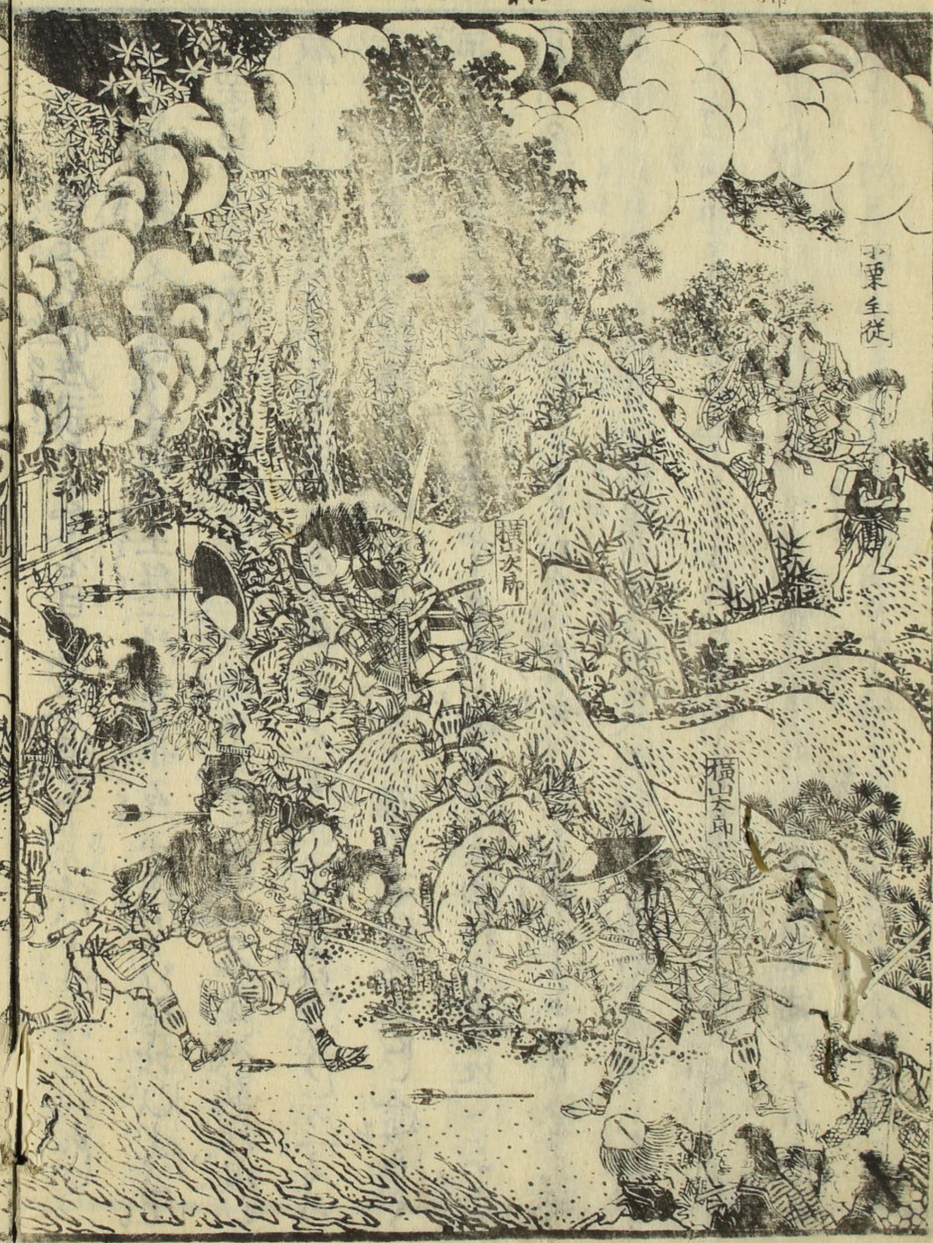
小太郎は斉員に風間兄弟のあふ潤色をかき荷ひ、まこかはら氏
佳ひく六浦をさして落ちうせぬ。行もめくせぬ。樗山太郎安嗣。同次郎
安春は父の命によりて小栗が死生を見届んと。部下の賊徒数十人をおそ。
此所へ来向ひくり。互ふその心照天姫氏奪んと思へば。兄弟先を争ふく
向ひ合はぎてふ到りてその家裡の光景を窺ふ。門を八字ふ開れ元岡
兄弟廣樣丑頭目。弓矢たぐさみ高ちう嘶ひ足は小栗
判官代助重の臣丑。丘岡加治郎春教。同加次郎春高といふ兄弟の
りのく。只今こふ来ふ樗山の人こととそこれ。よくも来りうふ
えのく。汝ふ謀よりて我君あへくも敗れ毒酒をきこしめし給ふ
法会念仏うと称く。今自害ふ延なりさるかくふ我く兄弟防矢射く
汝ふを一く討ん君は家胡の後殿せん。いざや忠義の鏃うけとめよ。はこの結

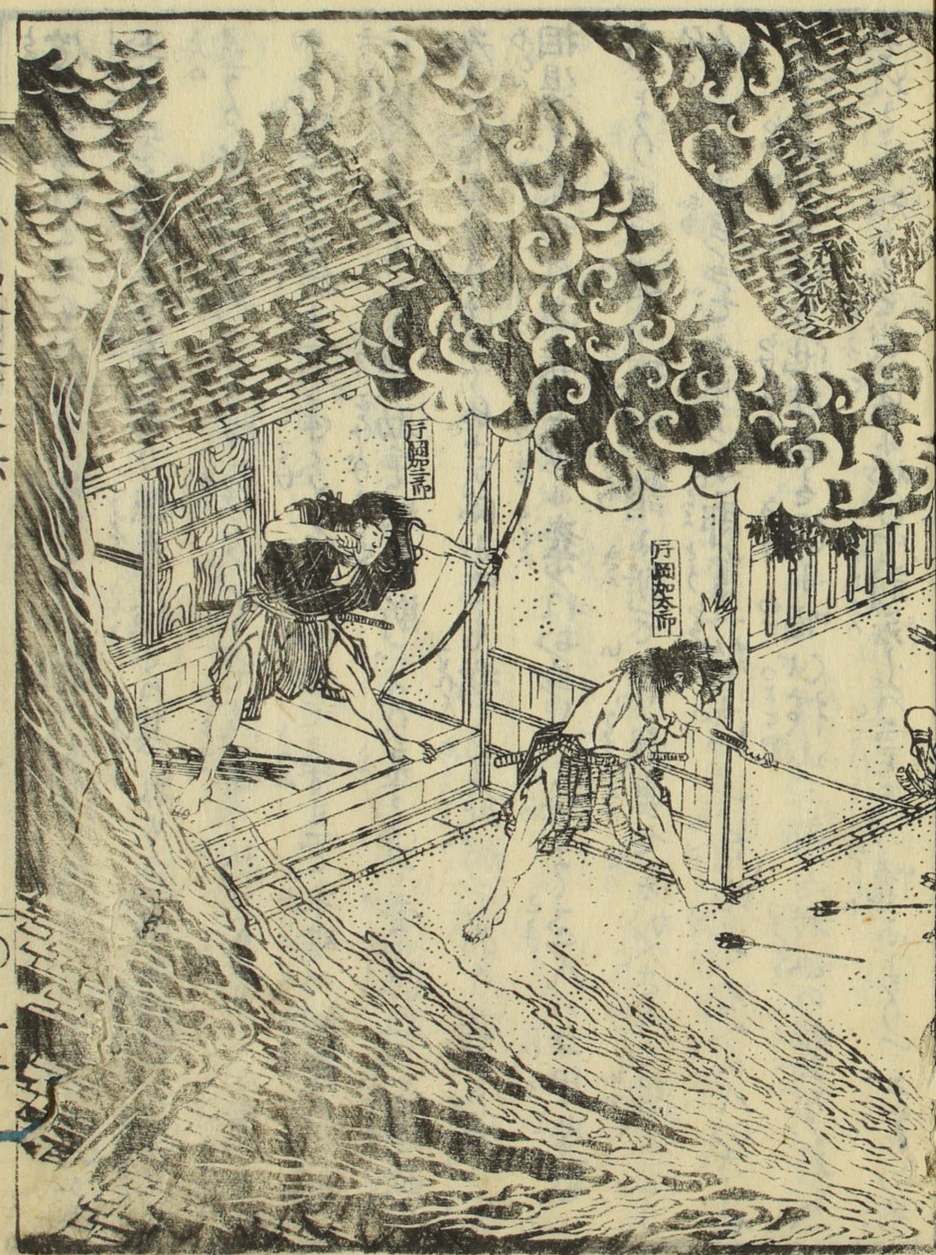
ひきはぎの散こふ射くりしうば。利欲おちる盗人ふ。元岡兄弟の新発よ
もそれ樗山兄弟下知とれど。後へのみ走りごみ一間なくふ来ふ法。
兎角さるうち敵の裡大ふ火発り焔くと燃あがれ元岡兄弟ふ矢ば
投捨今ぬくや星ちでなり。と太刀ぬきかざし樗山が勢ふ斬て入まば。
部下の徒兄弟の勇威ふ恐れ秋の木葉の散るごくしくくりと
逃失くり。相手なくれば兄弟ふ合ーて完ふと矢ひ。いざくらば君ふ
追着奪くんと。後門の方より忍ひ出くりきてまこ小栗判官代助重。
照天姫とりうこもに六浦の方へ落くりしよ仍ど料らん樗山三郎安武ハ
小栗ふ尋ね人ふあくふ。ゆば逃れ出ほここも。のふあとをくの部下と
引俱ー後道の方に埋伏ーて居くりしが。案ふ差ハ。栗主婦風る兄弟。
矢岩小太郎。玉手姫を佳ひ逃れ出ーうばさてこそとふ遁ー暴ふ結て

生のうりれば。小栗大きに怒る。馬を還して戦ひ、乱刃に手負美豆
小左衛門主ふる失あらんこと疑おそれ。照天姫をば。とあの木陰に立ちのび。
玉ま城をしてこれを守らし。三人一般おのおきにれて主を助け横山の勢と戦
ひ。助さ六さ〜〜し。此三人が武勇ハ万夫無尚ありといへども。さんぬ
不意を討れ二つのハ婦人を誘引うれが其仏ふれよく戦ふことを好まず。
且三郎安武千変万化の術を施し。彼方を討ハ這裡発り。這邪ハ制をれ
で彼方襲ふ従四人をとりこめて新くまと入智責ふ折ふ。さとぶの小栗
ふ従も労れ果てこれ〜〜ハ不ふ。忽然として横山が勢。後の方ようを知れ
らんで。右往左往に走り散れぬ。小栗怪しこ敵はぶふ立ぬ。堅ふ
左より池庄司。後ハ兄弟方ようハ田辺兄弟。後ようハ元岡兄弟。必死ふ成
て討入ようる。忠義の豪傑七人ふ切立られ。ゆゆしく敵とぶ。

ふなって敗走を。池庄司ハ三郎を目がけて追矢しぶ。後ふ追詰て行れり。
今ハこれ故一人もあぶれ。主従一所ふ集互ふ無なれをまぬ。
小栗ハこれで落ることを物語れば。元岡兄弟も横山兄弟ハ敗北追ひ
散せ〜〜ことをのべる。その時庄司申ようる。我と七人義経の方ふ結ようしが一人の
光信ふ行合ようる。彼僧の云ふ汝ふ主人ハ今六浦の方へ落ん。途ふ
城の名ふ若しめられいと者ふ。さやく敵ふ。ことふ答ふ。こふ走
ふつる果して僧の教のごとくなれば。有ふ主を三ふ戦ひふ。おりふ三郎
安武を討ふ。その首を助重の実検ふ入れば。主従かぎりなく喜び
けり。庁国赤を帝遣み出くやうを新ふ。前刺より事ふ。さぶれて姫君の法
事を問ふ。いづくふ。ひつくふ。せようとぶ。小栗前ふ城の〜ふ
国を〜附美豆小左衛〜て彼ふ木陰ふ忍び居ふ小左衛こ見

小栗夫婦
従臣を
将て
権現
堂村
と走る





使ひあれとあるふ。笑生命をうけて前の木陰よ往さくんふ。こゝいふ
玉を朱ゑ深こて失てあり。照天と娥くゝ其彩も白。ゆゑ沙猿と其辺を
尋するにさらゑ知ることを。絶えべ形くて主還り。形と告ぶこゞ。小栗を従
うゝ驚き。主従十人手分して。叫びて尋ぶで。木魂の回響のゝみて。
生影ごもこんこと。小栗助を切歯斯ごゝり尋ゝて索ねゐ。忍定故の
為ふ擒となりたゝふめさ。俺ゆても我くを従形てありゐがふ。此所を
相俱し来つれ我妻を敵ゑ奪れもめくと。此まてるんハ云甲斐形し。
あくより取て返し。横山ぶ館ゑ斬て入り。我妻を元かくさんと想ふなり。
人こいうゑ起ぶぞと同ふゑ。郎等一般ふいこで命を乗そべらんいさこせ
身人と云ゝらにも。池庄司を涙ゑ咽び横山三郎こを我母の健云なる形成。
それとも知ふと我ゑゆかけて討元ハ。皇天の情ふよりてぞゆふ。

君の巳大ゑゆふ望みゆゝ附前ゑ近まぐ陥ハ不忠よ似くゝいのくと母
の屍を形捨置ふ忍ひ祈ぶせめてハ生形を法一。巳後より走ふくへよ。
歩附の巳脹をゆゝれと父へめぐゝゑ助ゑも其孝心を感ぜ。我做
ゝゆハ私ゑ一て汝ぶ為ゝゆハ孝道ゝいこで孝と私と成かゑべき我も共ふ
汝が力を助け。王ゑ埋葬成営人くも孝子を助け行ゝせよといとも
賢ゝ主命ゑ池庄司ハさくゑも云ゝど陪従郎等一般ゑ。仁愛深ゝ主命
を感佩一ゝく畏こて涙を入れ一皮逸をかりの柩と助長が母の玉ゑ
の屍を法くゝおさゑ斧負ひは。さくべゝ寺院もめれしと四方成敬をみ
折ゝらゑ逆ゑ父こゆる念仏の声よ小栗を哀ひこゝ幸のことなりゝ今
世所ゑ来ほる俗を形み。玉ゑ導の師とせんと。念仏の声をゝくべは。
道成急ひぐ。尋ゑ至れば。一人の老僧白ゝ髪ゝゝ弟子ゝ養ゝ

衣を穿。左手に一鉢を持げ。右手に黎の杖を携。栗ことして歩こなる。その殿ゐ墨染の衣を着たる僧青法師二人従て。ゆくとなく来るふとくもおぼえけるが。小栗ハ深く信心を起し恭くれをして云へりさはハ某ハ小栗助重とやらのあてゆるり。郎等ゐてゆ池庄司助長とやらの。母不料も又ゐかゝて没命ゐ旅路のこゝゐくまぶ埋葬をぐ寺院もなく。新こゝふくとゐ仏像もおくさどいと幽憂想ひ悩こゝぐりゐ不意ゐ僧のこゝゐまうきゐのこゝを幸ゐり。あつれ導の師となりまつれし。やよ助長よ海もとゝゐ寄りて彩みなまとなるゐ助長涙もーぬぐひもこみ近づた老僧沢熟くこれゐこゝゐくゐ前刻よ主人の危難を告し僧ゐれハ驚たけこも礼ゐるし。前刻ゐ仏像ゐ遭まゐぐせどゐ主の危難を救ふこと社ぐりしゐ教よ僧く某ゐす忠ゐをさ給ふ。此恩いつ忘とまゐゝこゝた。よく未然を知

ゐまふゐ正しく仏菩薩の権化ゐこゝもそゝゐかゝるいとゞた僧よいゐ。まこ環舎こゝゐ佛神三宝の冥助とゐひこゝ保ゐり。頼くゐ大慈の恵ゐ。非命ゐ死せーたふちあれ。仏化を汲ゐ引ゐ涙と鬼をも欺くよ夫の母ゐ別の悲しゐゐ涙せきまるうるみ声ゐこゝさくもあやなくこゝ孝ゐこゝそゐ知ふれゐり。老僧うち点頭やよ助長こゝ渾因縁あるこゝなれゐ嘆くハゐゐく不孝ゐ。そも愛道を相州茂沢ゐる。三宝光院清浄寺の現住常阿とやゐりのゐて伝ゐ。足下ゐう従の前世ハ我まに因縁あること。且ハ過去未来のこゝまて。昨夜紀吉の夢相ようて。詳よ知ゐ前刻ゐ危難を告て主ゐ救し。今又こゝゐまゐて後来の幸を説んこゝと。疑念を発ゐ貧道ゐ言語を聴ゐ人くの足まで艱苦ゐ達ゐふゐ。見渾命ゐり。今日既ゐ九死を出く一生ゐ得ゐひしも又命ゐり。且ゐ栗毛の

内君を失ひ奉るを歎じ、甚行歩を捜索と志す人どもこそ愛しく易なれのみふあらぶ。のろく身の害ふ及ぶべきことあれば思ひ止りぬまん。内君の観音菩薩の恵護し給へば百折千磨あれども節を失ひ其身悪なくて后夫婦再会して栄ゆることありねば其下賤なれて居るべき歟再び寄すまり生路を求るふ易うじ。我寺ふ帰り如此くこれ謀を図て其禍を免れ給へと願ふ況や乞ひて小栗主従ふ托行上人の事ふ豫て仮人其徒を遣みおりのみ今ふ及ぶを去来のことを示され信心膳よ銘じつ。感謝の涙とぞあるる。当所のものも云ひざりしが。やがて助重をりそろ。凡俗の我く。過世の因といひるぐら菩薩ふ拍し仏像ふ値偶しなる。さ人冥加あるべ。志仏ふ示よあぐるあと。礼をやとなるをされ。ふ教ふ

ばうせ仏寺へ参りらんわどふ。尚この上のこと頼ことなるとまうしつ。こゆるべ。常阿上人い〳〵も貧道ど言語を聴こるふりのうね。歌の志のせね其前ふ。いざ多人くと仕ふうちふ助長を田よおられく弁かこなり。踏の踏居るを朋輩に慰められて漸と母の屍骸員ろく荒沢さして急ぎそう

第十一編

妬嫉欲を逞して二娘を宿を義婦身を殺して女主を救ふ

且説常阿上人を小栗主従を仕ひ荒沢なる体清浄ふ還りまふね。此所を是應永三十三年九月廿日の事なり。上人墓ふ傍をしく大穴ゆふ坑を堀じめ薪を多く積し。其中ふ玉くまは屍をおれこ上ふ火をさ〳〵たれ折〳〵も樵山太郎。同次郎を昨日片岡兄弟ふ欺うれと易うぶねこふ想ひ足非を云ひど。小栗主従を討えんと近郷の山賊

数百人をかゝゝゝ甚殿を逐て此寺おまり。小栗主従のことを問ふ。常阿上人横山兄弟ゐ對面し。我昨夜金澤ゐて小栗主従ゐ行遭した。彼輩酒毒発し苦痛ゐ堪へず。生べ死ぬ死めゝ孫べ。後世のことを祈ゝ人ゐ頼むよしをゆへゝはゞいと不便のことゐおりひこゝゐ供ひまりしゐ。終ゐ自害して果ヲぬ。されば其屍を刻んたゝゝふこと。玉ゐを茶毗する。小栗主従ゐうと歎ゝゐゐ。上人の偽ゝぎるをば。世の知ゝ処ゐれば邪智深き横山兄弟も。さてハ爾ありけゝよとゝゐふ。玉ゐを焼屍を焼息寺のあゝれば。いよゝ疑念ゐく。別を告て去ゝれば。上人小栗ゐ對ひ今ハ必易し。然ゐとても此寺ゐ居ゐゝ。人の疑ひあり。貧道三州ゐゆうりあるべ。人ゝをハ彼所ゐ忍べしゐゐゝゝ。心をを毎ゐ世を時の至るを待の人。自ら志を弘る期めゝんと教ゆゝゐ助重上人の言語よまゝ十人の郎等を率て。三州へこそ赴きゝゐ。

藤沢の道場ゐ小栗主従の石塔今ゐあり。并小栗夫婦の影像。且鬼毫毛ゐゝゐ世ゝゐ凄ゐんと。此寺の什物ゝゝ。今も存せり。此等の事を所説ゐ記しゝべれハ。爰ゝ説法ゝゐ。